

合唱組曲「赤坂の詩」

作曲・構成 大沼智幸

第一章「赤坂巡り」

江戸の板橋ふりだしに 中山道を西にとる 五十と七番目の宿場町
美江寺すぎれば 川渡り 呂久の渡しを船で越す
見えてきました 見えてきました 赤坂の町
赤坂町の板橋で 橋の欄干にと腰かけて はるか東を眺むれば
東に見ゆる岐阜の山 金華山にと咲く花は 桔梗や刈萱 桜花
またも 南を眺むれば 南に見ゆるお勝山
お勝山にとある寺は 後生菩薩の安楽寺

町の真ん中 四辻に立つと 昔の賑わいが聞こえます
北への道は谷汲へ 西には旅籠が立ち並ぶ 賑わい安らぐ町並木

「ほろほると なかせたこくぞう とうがらし

都長のちゆうざい あまざらし」

駐在さんはどこですか 今は港の会館で 静かに皆を見ています

「おちていくみとしりながら

もみじばの人なつかしく こがれごそすれ」

垂井宿から赤坂へ 和宮の行列が 静かに町に入ります
西の山には夕焼けの忘れ光が残ります
ねぐらへ帰る鳥たちの 声が寂しく消えました 消えました

関ヶ原の合戦の音が聞こえるお勝山 家康勝利のお勝山
道なき道を上がります
草のトンネルくぐりぬけ 竹のトンネルくぐりぬけ
道なき道をあがります やって来ました安楽寺
悲しい話のうば桜 今日もきれいに咲いています
梅雨の雨間に浮かびます お茶屋屋敷も夢の跡
牡丹の花が濡れています
赤坂の梅雨の晴れ間に つばめ舞う

第二章「杭瀬川 流れ永遠に」

杭瀬川という所を船にわたりて渡し守
ゆききにまもるくいせ川
月の兎もよるや待らん

池田の山の流水と 豊かに湧き出る真清水が
出会い生まれた杭瀬川
川辺に立てば思い出す 夏の夜空に舞う光

ほ、ほ、ほたる また来てね
夜空に祈った遠い日を 思い出せる杭瀬川
ほ、ほ、ほたる ふるさとよ ほたる舞い飛ぶ 杭瀬川
「船がでるぞ！」

赤坂港に響く声
人の暮らしをのせて 人の心をのせて 船は出て行く
杭瀬川から 揖斐川へ 船が出ていく
めざすは伊勢湾 名古屋の港
あの賑わいは あの賑わいは 遠い昔の物語

川は流れる 歴史を映し 思いをのせて 流れゆく
川の流れるは 変わっても 水の流れるはいつまでも
明日へこぎ出す 杭瀬川

第三章 「金生山 遙か」

日本列島の真ん中にパンの形の山がある
金生山 金生山 ふるさとの山
急勾配の坂道を登り詰めると パツと広がる 濃尾平野
二億年もの大昔 この山は海の底だった
大地が揺れる 大地が裂ける
大地が叫ぶ 大地が怒る
そして生まれた 金生山
大自然の生命が 古い昔の生き物が 静かに眠っているのです
ひっそりとたたずむ 金生山のこくぞうさん

聞こえてくるのは 山風ばかり

第四章 「赤坂 輝け！」

時の流れは川を変え 時の流れは山を変え
時の流れは道を変え 時の流れは町を創造る
山が 川が 変わっても 道が 町が 変わっても
赤坂の清風と 赤坂の心 変わらない
夢の町 人の町 心の町 赤坂

輝け 赤坂 あの大理石のように
輝け 赤坂 あの星のように
みんな みんな しあわせに輝け
みんな みんな 輝け！